

あるべき教養教育の姿を求めて

玉井 史絵

同志社大学

2015年に創刊された*JAILA Journal*は今年第4巻の発刊を迎えた。4年と言えば大学1年生が4年生となって卒業する年月であり、大学教育では一つの区切りを意味する年月である。過去4年間を振り返ると、グローバル化が進む現代において、どのような教育が必要なのかを真摯に問いかける数々の論文が掲載されている。

日々学生と接する中で、自分が生きてきた時代との違いを痛感する。子供のころ、私は百科事典を読むのが好きだった。本棚の一段を堂々と占拠する百科事典は、その物理的存在感によって、子供の心に「知識」の重みを感じさせていたように思う。当時の「教養」とは、財産のように心に蓄積すべきものであり、より多くの教養を積むことこそが大切だと考えられていた。翻って現代の「知識」はあの冊子体の百科事典のような物理的存在感と結びつくことがない。「知識」は心に蓄えておくべきものというよりは、必要な時にインターネットから取り出して、効果的に利用すべきものとなった。

インド出身のアメリカ人ジャーナリスト、ファリード・ザカリアはイエール大学で学んだ自らの経験を振り返って、そこでの教養教育が批判的思考能力や論理的表現力を養うとともに、いかに学び続けるかということを教えてくれたと述べている。「ある種特定の職業に必要な事柄を教えるのではなく、すべての職業に共通する土台を築く」というのがイエール大学の教育の神髄であり、ザカリアはその理念を全面的に支持している (*In Defense of Liberal Education* 2015)。知識を持つこと自体がもはやあまり意味をなさない時代にあって、こうした力を涵養する教養教育は今後ますます重要性を増していくであろう。

とはいえ、それが具体的にどのような教育であるべきなのかは、大いに議論されるべきである。紀元前5世紀のギリシャ時代にまで起源を遡ることができる教養教育は、時代や地域の変化とともに、そのあり方をめぐってさまざまな議論が繰り返されてきた。そして、そのはるか延長線上に現在の私たちは立っているのである。

ここに収められた論文の一つ一つがこれからの日本の教養教育の在り方を考える上での道しるべとなることを願ってやまない。